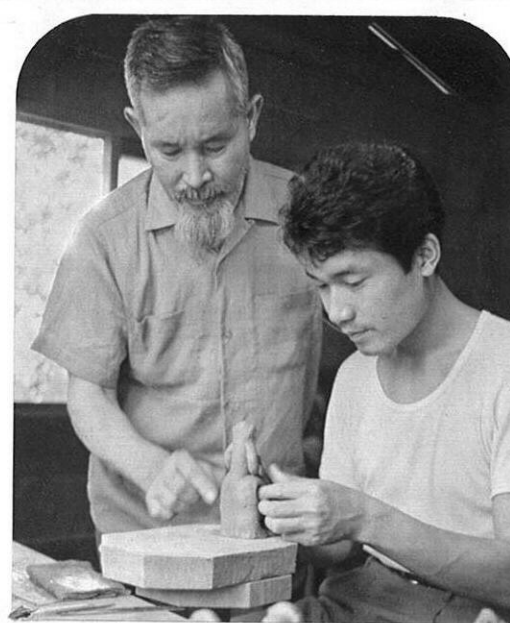


下・閑静な湖のオアシス……赤田公園（荒尾市）



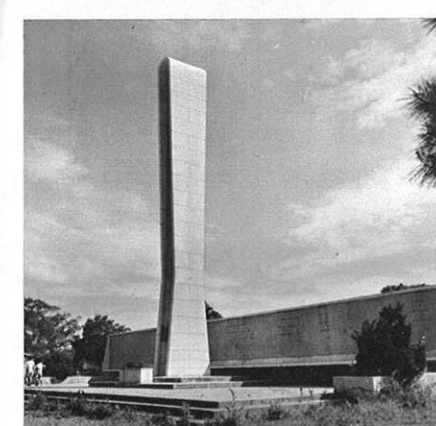
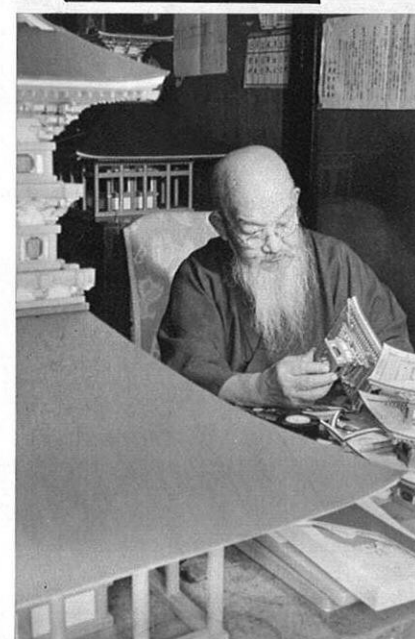
下・城北には随所に古墳群が見られる。(写真は山鹿市にある鍋田古墳の外壁。)



上・素朴な土偶「木の葉猿」をつくる永田さん一家。



上・200年の伝統をもつ来民うちわは民芸風な味が親しまれている。
下・西南の役の激戦地として有名な田原坂。(写真は田原坂公園)



中上・神納の紙器、山鹿燈籠は紙とノリの芸術として名高い(制作する松本翁)



上・夏のひと夜を踊りあかすという山鹿市の燈籠祭りには県外からの客が殺到している。

ここに人あり

ある養蚕農家

玉名市津留の 大村正勝さん

「ああ、蚕のこつば聞きにきなはったとでっしゅ。大村さんの家を探ねたおばさんに、図星をさされて、まず驚いた。しかし、それほど玉名市津留地区の人たちには、養蚕と大村正勝さん(五二)とが密着した形でとらえられているということでもある。

大村さんの家は、同地区では明治以来養蚕を続けてきた、ただ一戸の農家。大村さんもまた、梅林尋常高等小学校を卒業してから今日まで、土に生きてきた根っからの養蚕家である。この大村さんの精神的なバックボーンになっているものは、少年時代に八代の松田農場から学び得た、大いなる農民魂である。そして、この農民魂こそが、農業ばかりなく、大村さんのあらゆる面での大きな支えとなつてきているようである。

昭和三十三年この年は全国の養蚕農家に、一つの危機が訪れた年である。生糸がだぶつき、初秋蚕、晩秋蚕の繭価がそれまでの一・五当り三七〇円台から、二八〇円台へ暴落したのだ。国も補助金を出して他作自への転換を奨め、県下では三〇〇鈔余りの桑園が姿を消した。

しかし、大村さんは、長い体験にもとづく養蚕の将来の見通しの上になつて、「単位当りの収繭量を上げるなどの方法で、この時期をしのげば、また高値になる」と、他作目への転換を拒否した。そして、この年、大村さんは牛二頭と製繭機を導入した。

養蚕は土づくりから

「養蚕は土づくりから」というのが大村さんの養蚕における信念である。ことに桑葉は土作りの如何によつて一〇%近い収量の差がある。牛と製繭機導入の狙いもそこにあった。つまり、金肥による栽培は土地生産性の上で限度がある。このあい路を打開するため、糞加工の際に出る糞屑を牛に踏ませ、そこから生まれる有機質の肥料を、桑園の地力保全、土壌改良に利用し、桑葉の増収をはかったのである。

この養蚕と畜産の組合わせは、その後、県が推進した新養蚕体系と期せずして一致したグッドアイデアであった。そして大村さんの確信通り、繭価も翌年から、四〇〇円台の高値を示し、県下の桑園も三十七年には逆に約四〇〇%増加した。大村さんの新養蚕は、三十八年に荒地五〇町を購入して、一一〇町の桑園化を実現。三十九年からは、省力化のため年間桑葉も採用。牛も五頭にふやし、有機質の増投でさらに充実したものとなつた。

大地に生きる

研究熱心な大村さんは、若い人に対しては「暇があれば日雇に行くというのでは駄目。自分の作物を真剣に研究して欲しい。」という。「大村さんの場合、農政と農民の結びつきがしっくりしている好例でしょう。」

大村さんのアイディアマン振りは、今年四月に完成した、軽量鉄骨二階建て、延べ面積三六〇平方尺の専用蚕室にもみることが出来る。一階は飼育室、二階を上簇室にわけてあるが、この内、二階の上簇室に大村さんの苦心の程がうかがわれる。つまり二階は、湿気を防ぐとともに暑い時期には外気を防ぎ、寒い時期には冷え込みを防ぎ、上簇室には最適というわけ。



桑園で働く大村さん一家…右端が大村正勝さん